

新たな荒れにいどみながら、京生研に結集しよう

1. 初めに

私たちは、80年代の実践総括に立って、課題を抱えた子どもへの個人指導を実践の重要な切り口として提起してきました。この実践の重要性と、さらなる研究の必要性を自覚することを基本にしつつ、今、新たに起こっている問題状況を洗い出してみることに迫られています。

それは、小学校高学年の荒れの状況です。研究部が着目したのは、今年度基調作成の会議からです。十分な分析、討論がなされていないことを承知の上で、研究、実践を進めていくための提起として受けとめていただきたいと思います。

共感、共闘、共生というキーワードで提起しつづけている、私たちの実践の対象である、子どもと子どもの世界の変化に目を向け直してみたいと思います。

2. 小学校高学年の荒れを考える

統計的把握は困難であるが、京都の各地で、小学校高学年の荒れが、相当な量と、深刻な状況とになっていることが予想される。研究部員が持ち寄った各地の状況をまとめてみると次のようになる。

- ・市内、乙訓、宇治、綴喜、福天において、すでに深刻な事態として広がり、亀岡においてもその前兆が見られる。
- ・その事態とは、教師反抗とイジメの広がりをもとにした、指導困難による学級崩壊とその広がりの中で、授業不成立、エスケープ、茶髪、ピアス、そして、器物破壊、空き教室侵入といった、中学校の荒れと変わらない状況が報告されている。
- ・いったん荒れ始めると、その事態は、その担任教師のもとでは改善されることがなく、手を打てば打つほど状況は進行する。5年から6年に持ち上がりが困難になり、担任が交代するケースが増えており、さらには、6年の持ち手がなく、転任者が持つことも多くなっている。それでも、荒れをおさえ、持ちこたえさせるのが精一杯で、卒業を待っているだけというケースが多い。
- ・高学年の荒れの裏には、3、4年における学級内の荒れが、他から見えにくいまま進行していたり、力によって押さえられていることが多く、クラス替えにおいて表面化したと見るべきものが多い。
- ・中学年から高学年へと進行しながら、荒れが広がる経過をたどってみると、次のような流れを考えることができる。

少年期的な子どもの関係が形成される過程において、子どもたちの交わりをつくりだしていく商品文化が、同調的に広がり、対峙する学校、教師の指導とのすれちがい、ズレが、子どもたちの世界に、反学校、反教師的な気分をつくりだし、この気分を背景にして、最初に指導拒否、反抗が表面化するのには、能力主義競争に過剰に参加する子ども、スポーツ少年団に参加している子ども、または、低学力、未発達、家庭の問題を抱えた子どものいずれかがやり始める。校区の状況の違いから、どのタイプの子どもの表面化するかは違いがあるが、共通するのは、いずれかの子どもの行動をきっかけに荒れが急速に広がるということである。

このような事態が、今後、いっそう広がっていくことを予想し、子どもの問題をとらえ直していきたいと思います。

3. 荒れの中で実践的に着目してみたいこと =新しい事態として=

小学校の荒れ、学級崩壊に対して、克服した実践が今のところ皆無であることを重視したいと思います。

これは、「小学校は荒れたらおわり」という事態として、教師につきつけられていることを意味し、小さな崩れに対する指導方針の統一を困難にしまい、担任任せになることで、事態が変化せず進む可能性があります。70年代後半から80年代にかけて、中学校の校内暴力が大きく吹き荒れた時のように、荒れの広がりの中でしか実践を見い出せなくなるようになるのでしょうか。

私たちは校内暴力期を苦悩し、その経験の中から京生研の実践家の実践を分析して今日に至っています。京生研の総力を挙げて、荒れの分析から実践を導き、検証し、実践視点を打ち出していかなければなりません。この作業を通して、荒れの広がりの中にある、子どもと親、そして学校との新しい事態としての関係を解読し、新しい実践視点が開かれていくことを確信したいものです。

切り口としての仮説的分析を提起したいと思います。

①反教師、反学校的言動に容易に同調する子どもたちの感情の出どころについて。

子どもたちの中に広がる文化が、市場原理に誘導されたものであることは、誰もが考えることではあるが、商品文化に染まる子どもたちの中に、交わりの豊かな体験の無さからくる、商品を介して交わりを広げる欲求と、仲間を求める願いのあることを見落とせません。市場原理と商品化を排除し続けてきた学校が、今では、子どもの発達要求を抑圧してしまうものとなっているのではないのでしょうか。

②荒れのきっかけをつくる子どもたちの思いと、親の思いについて。

能力主義競争の中であって、抑圧感を抱えた子どもにとって、教師は効率の悪い授業をする教師であり、塾の教師の切れ味良い進め方、時には冷酷な切り捨てと比べて、イラック感情を抱えているのかもしれない。その中で、ガリ勉敵視でもすれば攻撃的になるのではないのでしょうか。

少年団の権威的指導にはまった子どもたちにとって、スカッと指導できない、たよりない姿に教師が映っている可能性がある。民主的で受容的なほどそう映るのかもしれない。

低学力、未発達の子どものためには、学校と学習のすべてが、今まで自分を抑圧してきたものと映っていることは十分に想像できる。

彼らの荒れが浮上したとき、彼らの裏にいる親たちは、「家ではいい子なのに」「野球の指導者には素直に言うことを聞いているのに」と、教師批判になり、時には自らの学生時代における反学校意識（それは、親となってあらためて期待し裏切られた思いもあって）からくる挑戦的批判となっていることも、いっそう指導不成立を深刻にしているのではないのでしょうか。

③荒れの事態の中でつくりだされる子どもたちの心性。

学校文化と子ども文化の対立構造の中から荒れが広がるとすれば、その荒れは、排他性[学校文化的なものへの排他性?]と商品文化への同調性として広がり、少年期の子どもの世界を劇的に変質させている可能性がある。排他的言語の広がり、抑圧と被抑圧の重層構造をなす子ども関係、他者の立場を認識できないことからくる自己中心性、そして学びの場の崩壊からくる低学力など、明らかにすべき課題である。

④中学校状況の変化。

小学校の荒れは、中学校の実践にも大きく影響を与えるであろう予想は十分に立つ。

その中身を的確に分析するには、小学校の荒れの分析を待たねばならないが、荒れの中で、成績上位の子どもたちの公立離れ、いっそうの低学力の進行は大きな課題となる。また、その中で、「勉強だめなら俺はヤンキーになる」と、水際の選択を自覚して入学する子どもと親の出現は、中学校を大きく揺さぶることになるのではないのでしょうか。

4. どのようにとりくむのか —旺盛にいどみ、検証するために—

先に挙げた分析は、私たちが実践し検証するとりくみの中で深めていかななくてはならないものです。誰かの分析を待っていたりして、手をこまねいては何も進みません。

大切なことは、先の仮説を実践的に深めていくことです。そのためにも私たちの目の前の事態に旺盛にとりくみを展開していきましょう。その際の重要なとりくみ課題を提起したいと思います。

- ① 学校文化と子どもの文化の接点をつくり出すとりくみ。
- ② 能力主義的価値観にとりこまれた子どもと親への共感、共闘的指導の追求。
- ③ 被抑圧的状况の子どもと親への共感、共闘的指導の追求。
- ④ 新たな中学校実践の追求（とくに低学力、ツッパリへの）。

すでに発表されている今村実践におけるダンシングチームのとりくみをはじめとする、子ども文化を受けいれ育てるとりくみや、進学塾に通う子どもへのアプローチなどは、上記の課題にすでに迫るとりくみであると思われるが、現時点で十分な分析を加えるまでには至っていない。今後、多くの実践を持ちよりつつ、慎重に分析していきたい。

5. おわりに

小学校高学年の荒れに対して、仮説的分析と実践の展開を呼びかける基調提案になりました。基調提案の不十分さと同時に、京生研研究部としての飛躍の可能性も感じつつ提案を終わりたいと思います。（文責 藤木）